達人推挽

この渋谷氏の禅室では南隠禅師の高弟南岳師（後大阪寒山寺住）としばしば出会い法門を談じあわれた。南岳師は上人の博学悟達の人であることを（晩年まで）しきりに歎賞たんしょうしておられた。

南隠禅師

その師禅門第一の大徳南隠禅師はまたずっと以前より上人の悟境を鑑得して、たれかれに上人を推挽すいばんしておられた。維新の際、幼君を奉じて官軍の重囲を破り出でし女傑近藤祐子氏も禅師ぜんじにつきて長く坐禅した練達の行者であったが、南隠禅師より上人につくようにさしむけられて以来、上人に師事し口称念仏くしょうを勇猛ゆうめうに精進して、のち三昧発得した婦人であるが、ある時などは念仏中、隣まで火事が燃え移ってきたのを知らずに念仏していたことさえあつた。

雲照律師

小石川目白の雲照律師もかねてから上人の高徳を歎賞して、よく機根によつては在家出家のその弟子を上人に向けて指導を請こわしめられた。河野広中氏（後の衆議院議長）のときも雲照律師から向けられて上人に師事した人の一人である。

明治仏教の四本柱

かつて上人の就学されしかずやまじつべん卍山実弁老師（時宗）とぎょうかいわじょう行誠和上（浄土宗）と南隠禪師（禪宗）と雲照律師（真言宗）とは廃仏毀釈の弾圧下（浄土宗）にありし明治初年の仏教を支えきたりし四本柱といわれたのであるが、この四人とも上人を推挽していられたのである。

見性宗範老師（後紫野大徳寺住）もはじめ横浜に在りてしばしば上人に接し、その内証に敬服しておられた。

関 東 ・ 東 海

明治三十年（一八九七）三十九歳 東京の矢野寿光氏は南天棒師につき坐禪に年をかさね、自然居士と号していた。初め試してみるくらいのつもりで、上人を招待してお目にかかつてみると、これはただ人でないと深く帰依のおもいをなし、お帰りの時などはいつまでも後姿を拝んでいた。しばしば教えをうくるにしたがい、今までの禪的の気骨は柔和の相とかわり、行状も一変した。

その夫人も信心を発したたびたびお宿を願ひ、かりそめの別れも遠国旅立ちの思いがして、あとを慕う心が念仏の励みとなつた。ヒラつきのお膳を供えたと余計な料理には手をつけられず、いつも手のかからぬがご馳走といつておられた。朝お眠りの邪魔にならぬように掃除の音も立てず静かにして、さて御室に伺うと、早や床はたたみ端坐して念仏しておられた。

ある寒い晩、あまり寒そうな様子の上人に胴着を供養してお召しを願うと、お出掛けの帰りにはもうお召しになっていない。でお尋ねすると、

上人「物を乞う人が寒空に寒そうにしているのに、白衣や法衣では在家の人には間に合わぬから、折角作つて下さつたけれども、胴着を脱いであげてきました。」

上人「人間は窮極のどんぞこに入って、始めて精神のどんぞこより湧き出づる一心の金剛石に比すべき真価が現われる。」

また「失敗の過程をへずして成功したるものは、精神的に墮落することを免れず。」

また「人は遠大の希望なしに生活するが故に煩悩の奴隷となる。」

ある年、善光寺の檀徒に死亡者あり。多く不在がちの上人に松戸で邂逅した村の人、この由を告げて上人に歸寺葬いの引導を頼むと、合掌回向し、

上人「実は今日東京に信者の集りがあつて、その方へ生きた者の引導に行かねばなりませんので。」

法 語

「蠅はたとえ皇居の莊嚴極りなき宮に入るとも、蠅のためにはなんの立派ということはない。そのごとく人間の業識をもつてせば、なんの処か人界ならざらん。もし一心念仏して自己が弥陀と同化する時は、見聞覚触として仏境界ならざる所なきに至らん。」

「この度往生し候事は、人にはよらずだれもく申せば助かると計り心得て、世にたぐいなき悪人なりと雖、南無阿弥陀仏と唱うれば、一念にても決定往生を遂げ候」

明治三十年十月伊藤桂一郎氏上人に帰依してもつばら仏道に志し、出家して心如と号し、五香善光寺に入り院代五十嵐師と代った。氏は独逸協会学校出身にて、小石川に鳴鳳義塾を営み通信省に勤めた人、修行のかたわら善光寺に塾を移し至誠会と名づけ、通算三百人くらい教養し、四十一年没するまで五香に院代をつとめた。

不繕住坊

善光寺は本堂はできたけれども、庫裡は古屋のままであつたので、ある時雨漏りはなほだしく心如氏これを上人に訴えて修復を乞えば、

上人「雨が漏れば漏らぬ方でやった方がいいでしょう」

と新築のため迷惑を人にかけることを肯^{がえん}じられない。(しかし後年に至り心如氏もつばら尽力して庫裡を新築した。)

心如氏からはおりおり英語を学ばれた。都鄙いたる所の宿所にある近代學術の諸書はこれを仔細に読まれた。

この年渡辺信孝氏も帰入して明治三十四年まで随行した。氏は日清戦争の時軍事探偵として彼の地に働きし人、豪胆なる武勇談に富み、したがって軍事の必要上、清人に対する残酷なる

経歴もあり、凱旋後殺した者の思い出に苦しめられていた。機縁ありて仏門に歸し、初め雲照律師についていたが、山下現有僧正の徳望をきいてその門に投じた。僧正は知恩院に管長就任さるる前芝増上寺に住せられていて、上人のことを今の世にまたとない大徳であるといつてしきりに歎賞されていた。渡辺氏は僧正から拙堂の居士号を頂いて増上寺の黒本尊様の前で一心に念仏していたが、ある日僧正から「弁榮和尚が今參州かどこかを巡錫しているから、これからそこに往つて、その大徳について道を求めよ」とさしずされ、上人の居所をきき合はして、即刻東京をたち、大垣の円通寺で震災横死者の回向中であつた上人をお訪ねした。

僧侶は日本のどこにいますか

その時參州荒井山九品院の弟子で豪傑肌で支那布教を思い立つていた今井達明師も同行した。今井師は上人に己が志を述べると、上人「どうして支那に布教に行く気になつたのですか」、師「日本に念仏を教え下さつた善導大師の恩に報いるために行きます」上人「それなら支那まで行かずとも日本で念仏申せばよいでしょう」、師「日本には僧侶が沢山いますから」上人「日本のどこにいますか」

それから上人は「支那の布教よりも、まず自分が念仏のありがたさを知らねばならぬ、一心不乱にこの身も心も阿弥陀様にささげ、我をなくして、しつかり念仏になつてしまわねばなら

ぬ。念仏で鍛えなさい。支那にでも行こうというのに鉛のような刀ではだめである。支那にも人物はおる。ナマクラ刀では間に合わぬ。刀さえ鍛えておけば、敵の刀をうけると敵の切りこむ力で敵の刀が折れる。まず一心に念仏して鍛えなさい」と諄々と説き聞かされた。

それから同行の渡辺氏に向つて、上人「あなたはどこから来ましたか」、氏「私は芝の山下僧正の弟子で、僧正にすすめられてまいりました」上人「いま申した事がわかりましたか、一心に念仏申せば仏様が適当なご用をいいつけて下さいます。身も心もささげて仏様に帰命し一心に念仏しなさい」

初め上人のことを半分疑つていた今井師もすっかり頭が下がり、渡辺氏も帰依の思い身にしみ、随行をさしていただくことになった。(今井師はよく修行していたが、その後若くして亡くなった。)

今に人がくる・鼠が掌に

一日大垣のある寺の閉めたお室で渡辺氏がお側にいると、今に人がくるから云々と氏に用事をいいつけられる。氏がどうし

て知れますかと尋ねれば、「今向うの松原の松陰に馬が通つてゐる。その後を訪ねてくる人が歩いてゐる」といわれる。室の中から松原さえ見えない。しばらくすると果して訪ねて来た。

渡辺氏が伊吹山にこもつて念仏して、上人のもとに帰った時であつた。上人はいつもの通り、米粒を左の手のひらにのせて、同じ左の親指と人さし指で掌の粒をとつては書き書きしておられる。氏は御室に入ろうとして、ふと隣室からみると、鼠が二匹、一匹は上人の手のひらに、一匹は膝に上つて、平気で米粒をたべている。氏は驚いてしまった。そつと室に入ると鼠はたちまち逃げてしまった。氏「上人いま鼠がいましたね」、上人「うむ、いた」。氏「なぜ私がきたら逃げたのでしょうか」とお尋ねしたら、上人「それはお前がえらいからだ」

蟻のむらがり

ある時、同氏がお伴をして道を歩いている時、近道しようと思つて「上人こちらへ」と申すと、上人「そちらへ行くな」、氏「こつちが近いですから」、上人「いやそちらには蟻がたくさん集つているから行くな」、氏「どこにもいないじやありませんか」、上人「いやむこうに」はたしてどうかと思つてその方へ見届けに行つたら、矢張り蟻が群つていた。すぐ引きかえして上人に追いつくと、上人「お前は疑深くていけない」

遠い活字

一日上人、明日はなん時の汽車でたとうか、何時何分のと何時何分のとあるといわれるので、「上人は時間表をお持ちですか」といえば、上人「いや持たないが、むこうに張つてある新聞に書いてある。少し古くてもそう違つてはいまい」その新聞

は七八間むここの壁に貼られているのであった。

胃中の鰻

他の本を読むことはすこしも勧められなかった。「一心に念仏せよ」の一点張りであった。ずっと後のこと、同氏が浅草誓願寺に随行していた時分、織田得能師法華経講義の本が新聞広告に出ているのがよさそうなので、読みたくてたまらないが、金はないし、上人に申し上げてもお喜びにならないのはわかっているので、黙っていた。すると「拙堂、法華経講義は読みたいか」と聞かれたので、驚いて「ハイ」と申上げると「それでは買いなさい」といって金をくくださった。すると本屋で割引値段で売ってくれて六十銭手に残ったのを、これは割引の金だから頂戴しようと、勝手な考えをして、つい鰻飯と焼鳥を食べてしまい、寺に帰って、かくすために口を塩で嗽ぎ、次の間から「ただ今帰りました」と挨拶すると、「鰻飯はうまいか」と問われた。ハツと思つたがそしらぬ振をして、氏「もう一年もそんなものは食べませんから」、上人「イヤ今日のは一ぱいでは足るまい。焼鳥はうまかつたか」、氏「上人、どうしてわかりますか」、上人「お前のお腹の中にある」。

法語

宇宙に本然の大道がある。この無上の大道に則つて至善の極に通達する道を釈尊が発見してこれを仏道といつた。道というの外でない、人の精神が真善美の極致に向つて進趣する行程のことである。